

令和 6 年 9 月 13 日現在

機関番号：43911

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20280

研究課題名(和文)子育て支援における子ども理解を基軸とした保育者と保護者の「相互理解」の可視化

研究課題名(英文) Visualization of "mutual understanding" between caregivers and parents based on understanding children in support of parenting

研究代表者

木田 千晶 (Kida, Chiaki)

岡崎女子短期大学・幼児教育学科・助教

研究者番号：60908680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、先行研究から子ども理解という言葉の扱い方を検討した結果、子ども理解は実践と隣り合わせの概念であるため、その言葉の意義は流動的で定義することは容易ではないと考えられた。本研究では、どのように子どもを見て、理解しようとするかを観点とした子ども理解を基軸にすることとした。第二に、保育者と保護者の子ども理解を検討した。多声的ビジュアルエスノグラフィーの手法を援用した調査とSCATによる分析の結果、保育者は、遊びそのものの教材的な価値を判断し、よりよい遊びの実践を目指すことが示された。保護者は、外面化する子どもの姿に着目し、子どもが感じる遊びの楽しさが関心の中心となる傾向にあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「子ども理解」という言葉の安易な使用への警鐘を示した点、保育者と保護者の子ども理解を検討したうえで示された、保護者にとっての保育のわかりづらい点を明らかにした点において、本研究の学術的及び社会的意義が示されたと考える。保育者と保護者の違いを前提として、互いの立場から見える子どもの姿や保育の有り様を補い合うような形で関係を構築することにより、保育者と保護者の相互理解を促進できるのではないかと考察された。対等なパートナーシップの構築を前提としつつ、保護者にとって見えづらく、わかりづらい保育や遊びの意義について、保育者から保護者に言語化する必要性が示された。

研究成果の概要(英文)：First, we examined how the term "understanding children" was used in previous studies, and found that understanding children is a concept that goes hand in hand with practice. Therefore, the meaning of the term was considered to be fluid and not easy to define. In this study, it was decided to base the understanding children from the viewpoint of how they see and try to understand children. Second, we examined the understanding children of caregivers and parents. This study was conducted with the multivocal visual ethnography method, and was analyzed by SCAT. The results indicated that caregivers judged the value of play itself as a teaching tool and aimed for better play practice. Parents tended to focus on the externalizing child's appearance and were more interested in whether children enjoyed the play or not.

研究分野：保育学・幼児教育学

キーワード：子ども理解 遊びの理解 子育て支援 保護者支援 質的研究

1. 研究開始当初の背景

本邦の子育て支援は、少子化対策を基盤とするものから、子どもの育ちを確保するためのものへと支援の本質が変化し、子育てや子どもの育ちを社会全体で支えるべきという認識も広まりつつある。子育て支援の充実を図る取り組みや、子育て支援に関する研究結果が数多く報告され、保育者が保護者に歩み寄る必要性は十分に認知されているといえる。しかし、保護者側からの保育内容や保育者への理解の内容や程度が関心の俎上に載ることは少なく、「相互理解」が成立しているかについては疑問が残る。保護者側からも保育者への理解を促す必要性が示唆される。

申請者は、子育て支援に関する研究として、母親と父親の子育ての現状と育児観を検討してきた。一連の研究から、親は子育てにおける経験や感情を通して親として成長し、子育ての専門性を独自に身につけていくと考えられた。家族だけで心理的・物理的に支え合うにはある程度の限界があることも示され、支援の必要性も明らかとなり、最も身近な支援の場として保育施設への期待が高まっている。異なる専門的な立場にある保育者と保護者が信頼関係を築き、「相互理解」を成り立たせることは容易ではないが、子どもの育ちという共通の目標を実現するためには、互いの異なる専門性や視点を理解することは喫緊の課題と考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育の専門性を有する保育者の子ども理解と、子育ての専門性を有する保護者の子ども理解について、それぞれの子ども理解の視点を明らかにし、子育て支援で求められる「相互理解」を可視化することである。

3. 研究の方法

(1) 資料動画の作成

幼稚園の自由遊び場面における子どもの姿をビデオカメラで撮影する。

個人情報や映像の適切性の観点から動画を編集し、動画撮影協力園の保育者に動画内容を確認する。

の指摘箇所を修正し、再度確認した上で4つの場面を資料映像とする。

(2) 集団討議の実施

調査協力者は、現職の保育者(4グループ)と子どもを保育施設に通わせる保護者(4グループ)である。多声的ビジュアルエスノグラフィの手法をもとに、(1)で作成した動画を刺激媒体とする集団討議を実施した。各グループには(1)で作成した動画を視聴してもらい、各動画を視聴するごとにその動画内容に関する感想を自由に語ってもらった。特に、「保育者と保護者は、幼児の遊び場面に対してどのような解釈をするか」というリサーチ・クエスションに基づいて、5つのインタビューガイドを設定した。この映像を見て思ったこと、印象的な子どもの姿について、映像中の子ども同士の関わりについて、映像中の子どもが遊ぶ様子や姿について、(保育者のみ)映像中の子どもたちの担任だとしたらどのようなことを考えるか、(保護者のみ)我が子がこの中にいたとしたらどのようなことを考えるか、である。保護者には、保育実践について語る難しさがあると予想されたため、我が子の姿を映像中に思い浮かべることで保育実践に関する語りを引き出せるよう問いかけた。討議中は、協力者たちが映像資料に対する感想や考えを自由に語るができるよう、申請者は頷きや相槌を基本姿勢とした。協力者の語りに対してさらに詳しく聞きたい場合は、適宜質問を行う場合もあった。

集団討議によって得た語りを逐語化し、逐語データに対して、SCAT (Steps for Coding and Theorization) による分析を行った。

4. 研究成果

SCAT で生成された<テーマ・構成概念>をカテゴリーに分類し、保育者と保護者の遊び場面に対する解釈の傾向を考察した。例として、4場面のうち「サッカー遊び? ドッジ?」に対する語りを例に研究結果(表1, 2)を提示する。

分析の結果、保育者と保護者の「カテゴリー」の違いとして、「子どもへの考察的関心」と「子どもへの直感的関心」の違い、「遊びへの評価的関心」と「遊びへの受容的関心」の違い、「保育実践理論の裏付け」と「保育の確認と要求」の違いが示された。保育を通して見る子ども、遊びを通して見る子どもへの理解において、子どもや遊びを考察的に捉えるか(保育者)、心象的に捉えるか(保護者)という、保育者と保護者の子ども理解の違いが示された。保護者にとって、保育者が意図する保育のねらいや遊びの意義は、見えづらく、わかりづらいと考察された。保護者にとって、保育とは自ら理解しようとする機会に乏しく、その必要性も希薄である。よって、保育者から保護者に伝える子どもの姿は、保育的な意味が含まれるがゆえに、保護者にとってわかりづらいことがあるのではないか。そのため、保育者には、子どもたちが遊びの楽しさを通して具体的に経験していること、例えば葛藤やトラブルの意味を含んで、子どもの遊び経験を言語化する役割があると考える。保護者だけでは気づくことができない、子どもの新たな姿を言語化

することこそ、保護者との関わりで発揮される保育者の専門性と考えられた。一方で、保護者だからこそ見えてくる子どもの姿があることも示された。保育者は、自身の保育的な視野で子どもの姿を見ようとするだけでなく、時に保護者の視点から見える子どもの姿にも目を向けることが重要と考えられた。保育者だけが視野を広げ専門性を高めるだけでなく、保育者と保護者が互いの盲点を補い合うような関係を目指すことこそ、保育者と保護者の「相互理解」を促進するのではないかと考える。

表 1 保育者の<テーマ・構成概念>一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	テーマ・構成概念	
子どもへの考察的関心	楽しむ姿の認知	漠然と楽しむ姿	
		ボール追跡を楽しむ姿	
		自己完結型楽しさ優勢の姿	
	子どもなりのルール観への思考	協同意識によるルール伝達の姿	
		勝利への執念によるルール伝達の姿	
		正式サッカー忠実欲によるルール伝達の姿	
	遊び志向性の認知	不可解で想定外のルール逸脱の姿	
		正式サッカー実現希望の姿	
		勝負への執念の温度差	
	多角的な個人差理解	協同意識の差	
		正式サッカー忠実欲の差	
		ルール理解程度の差	
	遊びへの評価的関心	基本的子ども像の確認	ポジションこだわり理由の違い
			定型発達への想起
			協同性発揮への感心
子どもの発達への関心		蹴る技能への感心	
		漠然としたサッカー遊び	
		ゴール優先による自己完結型サッカー遊び	
遊び実態の認知		正式サッカー逸脱遊び	
		ルールの曖昧さ	
		保育者不在遊び成立への肯定的評価	
遊び方への肯定的評価		漠然としたサッカー遊びへの肯定的評価	
		サッカー遊び実現プロセスとしての肯定的評価	
		子ども主体遊びの限界	
遊び課題の指摘		遊び内容の時期尚早感	
		曖昧ルールによる遊び欲の低下	
		曖昧ルールによる無法地帯感	
「私なら」的提案	子ども主体遊びの保障欲	楽しみ方の不一致感	
		サッカー本来の楽しさ喪失感	
		子ども主体遊びの保障欲	
	形にとられない遊びの保障欲	形にとられない遊びの保障欲	
		共通理解促進目的の介入欲	
		協同性促進目的の介入欲	
	対話力の活用欲	対話力の活用欲	
		遊び終了原因の追求欲	
		共通理解による楽しさ促進欲	
	子どもなりの楽しさ実現遊びの提案	子どもなりの楽しさ実現遊びの提案	
		サッカー遊び実現困難感の想起	
		サッカー遊び実現プロセスの想起	
	遊び特性と遊び難易度の関連性の想起	遊び特性と遊び難易度の関連性の想起	
		漠然とした楽しさ誘発理由の想起	
		遊び突然終了場面の想起	
保育内容・支援の専門的省察	介入程度困難さの想起	介入程度困難さの想起	
		遊び方変容過程の想起	
		子ども主体保障と遊び意義保障のジレンマ	
	子ども主体保障と遊びの適切さとのジレンマ	子ども主体保障と遊びの適切さとのジレンマ	
		楽しさ保障目的の介入必要感	
		発達段階次第の介入判断	
	困り感次第の介入判断	困り感次第の介入判断	
		ルールによる制限からの解放支援	
		遊び難易度への配慮必要感	
	環境構成の見直し必要感	環境構成の見直し必要感	
		曖昧ルールの見直し必要感	
		子ども主体による思考力発達への期待	
	遊びを通した教育的効果の確認	達成感獲得への期待	
		保育実践内容への関心	
		保育実践蓄積による協同性の獲得	
遊びを通した教育的課題の指摘	遊びつづらさ誘発環境への懸念		
	子ども任せ遊びへの疑念		
	子ども主体集団遊びの難しさ		

表 2 保護者の<テーマ・構成概念>一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	テーマ・構成概念
子どもへの直感的関心	楽しむ姿の認知	漠然と楽しむ姿
		ボール追跡を楽しむ姿
		勝利追求を楽しむ姿
	ルールを意識する姿の認知	遊び仲間と楽しむ姿
		ルール理解努力の姿
		サッカーらしさ追求の姿
	肯定的な遊び態度への関心	経験者活躍の姿
		チーム感覚保有の姿
		子どもらしさ満載の姿
	明らかな個人差理解	ルール理解程度の差
		定型発達への想起
		子どもらしさの想起
	確固たる子ども像と現実的我が子像の理解	我が子特性の具体的想起
		定型発達子ども像との乖離
		家庭内我が子像との乖離
想定外の子ども発達への関心	対話成立への感心	対話成立への感心
		自己解決力保有関係への感心
		相互依存関係の妥当性
	ルール理解察の意外性	ルール理解察の意外性
		我が子不可能感による他児への感心
		子どもらしさ満載の遊び
	遊び実態の肯定的認知	蹴り成立のサッカー遊び
		既存の良好関係による遊びの成立
		正式サッカー逸脱遊び
	ルール実態の理解	最低限のルール遵守
		楽しさありきのルール遵守
		ルールの曖昧さ
	遊び方への好印象的感想	保育者不在遊び成立への感心
		漠然としたサッカー遊び成立への感心
		ルール遵守志向への感心
遊び方への疑心的指摘	正式ルール逸脱の愉快感	
	遊び突然終了への戸惑い	
	キーパー人気の意外性	
子どもならではのトラブルへの関心	大胆ルール違反の不可解さ	
	ルール遵守志向によるトラブル回避	
	傾聴力発揮によるトラブル回避	
保育者の確認と要求	要求的提案	曖昧ルールによる意見の衝突
		形にとられない遊びの保障欲
		子どもなりの漠然とした楽しさ保障欲
	子ども主体遊びの保障欲	子ども主体遊びの保障欲
		子ども間交流の保障欲
		安全性保障欲
	ルール指摘欲	ルール指摘欲
		要求次第のルール指摘必要感
		ルール指摘の不要感
	保育者介入必要感の思考	困り感次第の介入必要感
		仲介役としての介入必要感
		ルール見直し目的の介入必要感
	大人介入による制限からの解放必要感	大人介入による制限からの解放必要感
		保育特有の子ども主体保障への期待
		保育者による見守りへの期待
遊びを通した教育的効果への期待	ルール確立への期待	
	子ども主体による育ちへの期待	
	思考力発達への期待	
表現力発達への期待	表現力発達への期待	
	自己解決力発達への期待	
	人関係力育成保育への肯定的評価	

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木田 千晶	4. 巻 61
2. 論文標題 「子ども理解」研究の変遷から見た「子ども理解」という言葉の解釈と潜在的な課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 115 ~ 126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.61.1_115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 木田千晶
2. 発表標題 保育者と保護者の「子ども理解」は異なるのか 幼児の遊び場面の解釈を焦点として
3. 学会等名 日本保育学会第76回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Chiaki Kida
2. 発表標題 How caregivers and parents perceive children's play situations
3. 学会等名 The 23rd Conference of Pacific Early Childhood Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Chiaki Kida
2. 発表標題 Visualization of Understanding Children by Caregivers and Parents in Japan
3. 学会等名 European Early Childhood Education Research Association, 31st Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木田千晶
2. 発表標題 保護者は幼児の遊び場面をどのように捉えるかー保育者と保護者の比較からー
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木田千晶
2. 発表標題 保育における「子ども理解」の枠組と解釈の変遷
3. 学会等名 日本保育学会第75回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Chiaki Kida
2. 発表標題 Historical changes in research on " understanding of children" in Japan
3. 学会等名 PECERA 22nd (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------